

引き渡し

2024.5.20

避難訓練を行った。地震が発生した。その後、火災が起きたという想定での訓練だった。子どもたちを保護者に引き渡す訓練も行った。現実的な訓練である。子どもたちは、先生の指示をよく聞いて行動していた。

引き渡しの方は、メールで保護者に連絡する、幼稚園に来てもらう、子どもを保護者に引き渡す、子どもは保護者と一緒に帰るといったものだった。いざというときは、こういった流れになる。連絡を受けても、すぐには来られない保護者もいる。職場が遠い方もいる。おおよそ何分くらいで来てもらえるのかを把握するねらいもあった。

あの日のことが蘇ってきた。2011年3月11日は寒かった。雪が舞っていた。この日は、学校によっては、子どもの引き渡しが行われた。私は、南会津の中学校に勤務していた。南会津でも、今まで経験したことがないような揺れだった。浜通りや福島市の揺れは、相当なものであることは容易に想像できた。

福島市の学校の様子は、テレビの映像や家人からの話で知った。小学生などは、雪が舞う寒い校庭で、お家の方が来てくれるのを待っていたことだろう。先生方は、自分の家族のことを案じながらも、必死で対応したはずである。家人もその一人だった。

あの日は、各地の学校で様々なドラマがあった。後世に語り継ぐべき悲劇が起きた。その一方で、奇跡もあった。それらは、震災遺構や復興記念館のような施設、語り部の方の話、様々な資料や映像などから、10年以上が経過した今でも知ることができる。

数年前、宮城県の震災遺構である小学校に行ったことがある。もっと早く行くべきだったのかもしれない。だが、なかなか足が向かなかった。自分は教員である。あの当時のまま保存されている学校を直視できるのか、自分は何を思うのか。それが、こわかった。まだ、福島県の震災遺構の方には、行くことができずにいる。

10年以上経っても、毎年、地震は全国各地で起きている。数年前には、大きな地震が続いた。被害も大きかった。いつ避難が訓練ではなく、現実のものとなるかわからない。保護者に子どもを引き渡す日がくるかもしれない。

避難訓練では、子どもたちに話をした。「今日は、皆さんに一番大事なものを教えます。それは、いのちです。これよりも大切なものはありません」お家の方が、幼稚園に到着したときの子どもたちのホッとしたような笑顔はよかった。

他の学校もそうだが、幼稚園には、子どもたちのいのちを守り抜く重い責務がある。避難・引渡訓練を通して、そのことを改めて痛感した。